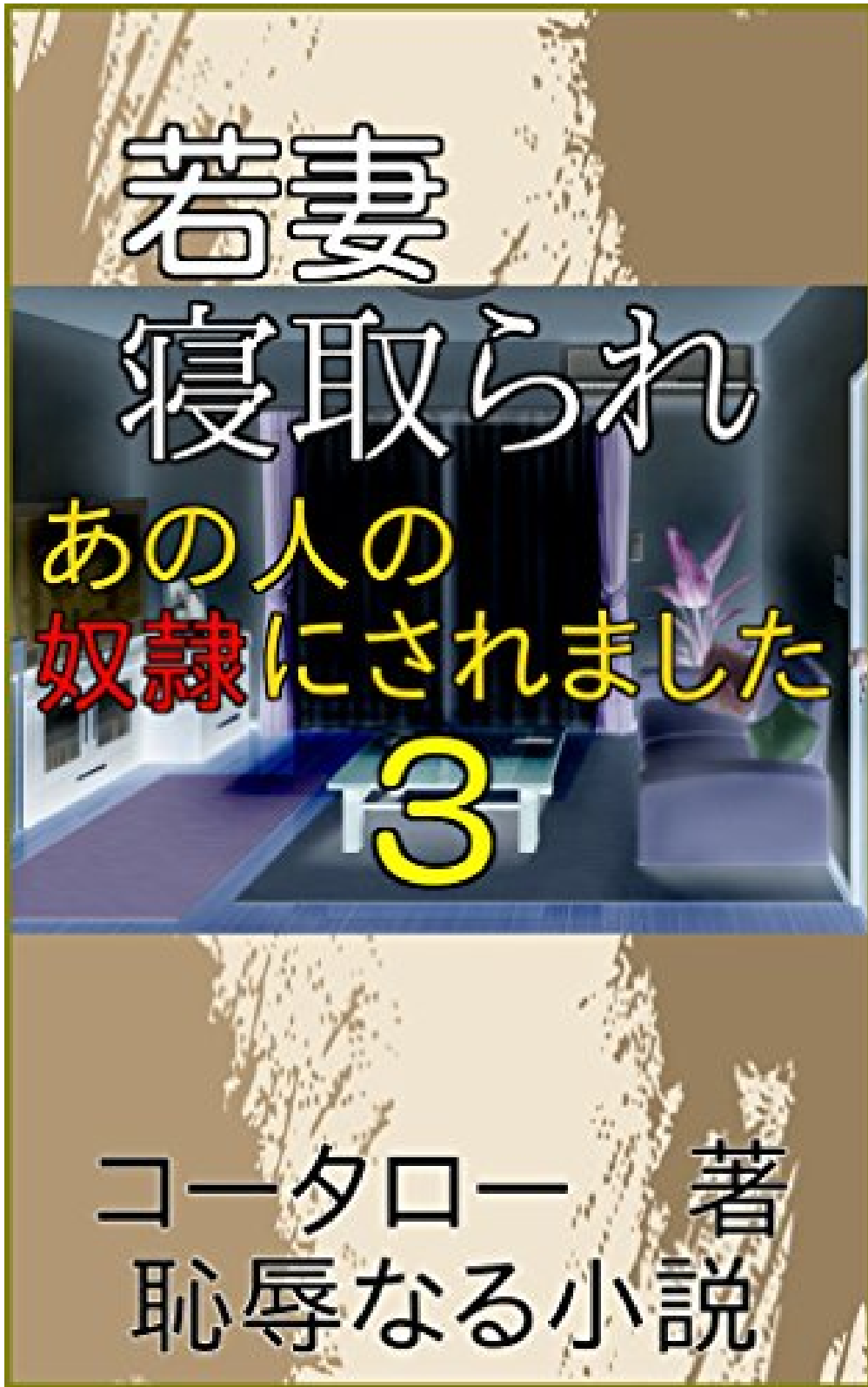


若妻・寝取られ～あの人の奴隷にされました 3 (恥辱なる小説)



発売日: 2017年5月5日

出版: コータロー

著者: コータロー

ページ: 125

24才の若い人妻を淫らな性奴隷に！
恥辱に泣き叫ぶ美しい女体に、他人の男の匂いを！
秘孔を滾る肉棒で貫き、艶やかな素肌に縄目の刻みを！
若妻をもてあそぶ凌辱地獄は、新たな生贄、18才の美少女を巻きこみ更なるステージへと！

縄の毛羽立つ繊維が、綾音の素肌をこすった。
ソレを跨らせていたのは、この時のため。
伸びきった縄目が軽く閉ざした内腿をいたぶり、ついには女の秘処に食いこむようにして。
「いい、痛いっ！ アソコに縄が当たってえっ！ お願い、ゆるめて……」
「オマンコが痛むか？ だったらその痛みを自分で解消することだ」
「さ、裂けちゃう……綾音の大切なところ……くぁあっつ！」

総文字数 39300字（本文のみ）

シチュエーション

若妻凌辱・人妻寝取り・麻縄縛り・瘤縄渡り・極太パイプ・集団輪姦・屋外パイプ責め

本作品は縦書きにて構成されています。

タイトル下の著者名（コータロー）をクリックしていただければ、既刊作品の一覧もご覧になれます。

作品詳細は、著者が管理する『恥辱なる小説』まで。
発行全作品の詳細な紹介と無料体験版が閲覧できます。

<http://chijoku.red/>

【題名】

第1章 若妻の花弁は、幼女にもてあそばれて……

第2章 美少女の秘密～白昼の淫行劇

第3章 花弁に食いこむ麻縄

第4章 快楽は瘤縄に与えられて……

第5章 穢される青い果実

第6章 美少女の肌は輪姦ショーに捧げられる

【登場人物紹介】

木下綾音（きのした あやね）

B84-W58-H86 二十五才

本作品のヒロインであり、結婚してまだ一年余りの若妻。
スタイル抜群な官能的なボディに、どこか愛くるしさを覗かせる美顔の持ち主でもある。
人妻らしいおしとやかで慎ましい性格。
夫を想い、自宅マンションで自慰に耽っていたところを智道に目撃され、それをネタに女の
肉体を……

皆川遥香（みながわ はるか）

B 7 8 - W 5 4 - H 8 0 十八才
智道が勤める水道工務店の社長令嬢である。
不況風が吹くなか、父親が経営する会社を支えようと、高校を卒業後は事務員として働いて
いる。
持ち前の明るさをバネに懸命にがんばっているが、そんな少女に卑劣な影が忍び寄り……

神山智道（かみやま ともみち）

水道工務店に勤める作業員。年齢は三十五才。
地方の高校を卒業後に都心の大学に進学。
しかし、折からの不況に煽られ、大学を出た後は派遣など様々な仕事を乗り継ぎ、現在は従
業員 5 人ほどの小さな工務店に身を置いている。
性欲は強く、時には強硬な手に打って出ることも。

黒服の男

経歴、素性は謎の男である。
常に上下とも黒のスーツを着こみ、感情を窺えない冷たい眼差しは、見る者を怯えさせる。
遥香を呼び出しては、淫らな辱めを加えている。

木下和則（きのした かずのり）

綾音の夫である。
中堅どころの商事会社に勤務している。
結婚してまだ一年余りだが、勤めている会社の仕事に追われる余り、彼女との夜の営みは疎
遠に……

タイトル下の著者名（コータロー）をクリックしていただければ、既刊作品の一覧もご
覧になれます。

【作品サンプル】

第三章 花卉に食いこむ麻縄

「ほどけないように堅結びだぞ」

智道が声を飛ばした。

一時的に両手を自由にされた綾音は、冷蔵庫の把手に麻縄をかけた。
言われた通りに、二重、三重に縄を通してから、力をこめて堅結びにさせる。

「よし、次はその縄を跨げ」

一本の紐に伸ばされた麻縄が、床の上を這っていた。

綾音は訝し気な顔をするも、智道に命じられるままソレを跨いだ。

「両手を後ろに回せ」

両腕には、再びガムテープの拘束が待っていた。

麻縄を結びつけたように、粘着質なテープが何重にも綾音の手首に巻きついていく。

「しばらくは冷蔵庫と睨み合ってる」

綾音が跨がされた紐は、冷蔵庫の正面ではなく真横へと伸ばされている。

それがなにを意味しているのか？

オーソドックスな性知識しか持ち合わせていない若妻には、知る由もないことである。

智道は全裸のまま待機させられる綾音に、少しばかり目をやった。

ジワジワと迫る得体のしれない恐怖に、美しい背中が揺れるように乱れていた。

(さあて、どんな顔をしてくれるかだな。綾音……)

縄を立繰り寄せては指を器用に使う。

武骨に見えて、なめらかに動く指先が、縄の繊維をしごいてはよじらせる。

「よおし、こんなもんだろう」

しばらく単純な作業に徹していた。

そして、律儀に背を向け続ける綾音にも聞かせようと、智道は声をあげた。

縄のもう一端を指に絡めると、やおら引いた。

「な、なんなの？ えっ！ やだ……」

床に這わされて、弛みきっていた麻縄が、ビュンと音を立てて伸ばされた。

智道の腕が持ち上がり、それに比例するように縄の高さも上昇する。

「そ、それ以上は……やめて、アァッ！」

縄の毛羽立つ繊維が、綾音の素肌をこすった。

ソレを跨らせていたのは、この時のため。

伸びきった縄目が軽く閉ざした内腿をいたぶり、ついには女の秘処に食いこむようにして。

「これが俺の答えだ」

「いい、痛いっ！ アソコに縄が当たってえっ！ お願い、ゆるめて……」

綾音の両足がめいっぱい伸ばされた。

それを追いかけるように、麻縄も持ち上がる。

智道が腕を高く上げるごとに、縄目がますます女の割れ目に沈んでいく。

「さ、裂けちゃう……綾音の大切なところ……くぁあっつ！」

足の指を残して、踵が浮き上がる。

不安定極まりないつま先立ちのまま、綾音が苦悶の声を響かせる。

「オマンコが痛むか？ だったらその痛みを自分で解消することだ」

「ンンッ、自分で……どうやって……？」

「俺の方へ歩いてこい。そうしたら、教えてやる」

智道は腕の角度をわずかに下げた。

冷蔵庫から一直線に伸ばされた縄も、幾分か下がる。

つられて、ぎりぎりまで浮かせていた踵もどうにか床に触れた。

「はく、くっ……お肉がこすれて……」

「そんなヨチヨチ歩きをしてたら、いつまでもこのままだぞ」

身体を支えるはずの両腕は、後ろ手に拘束されている。

智道の方へと。

そう促されても、後ろ歩きで進む綾音の身体は遅々として進まない。
（やっと1メートルか。残り4メートルってとこだな）
手狭なキッチンスペースから、やはり窮屈感は否めないリビングまで。
張り詰めた麻縄に、智道は目を落とした。
そして、ユラユラと揺れる縄に添って視線を走らせ、ユラリユラリと大きく揺らされる若妻
のヒップへと。
引きしめた尻の谷間の下限へと、1センチ、1ミリと姿を消していく縄の繊維まで凝視する
ように。

タイトル下の著者名（コータロー）をクリックしていただければ、既刊作品の一覧もご
覧になれます。

作品詳細は、著者が管理する『恥辱なる小説』まで。
発行全作品の詳細な紹介と無料体験版が閲覧できます。
<http://chijoku.red/>

<https://k2s.cc/file/a48233b8c0b63/xuD2jS8D8.pdf.rar>